

音順	方劑名 傷寒論・金匱要略条文	生薬構成 および製法・服用方法
いー3	茵陳蒿湯	<p>読み および解説・その他</p> <p>茵陳蒿 (苦平) 6g・梔子 (苦寒) 1.4g・大黃 (苦寒) 2g 上の3味の中、水400mlを以って、先ず茵陳蒿を煮て160mlに煮詰め、梔子・大黃の2味を内れて120mlとなし、滓を去って3回に分けて温服すべし。小便が当然、利するはずである、その尿は、サイカチの実を煎じた汁のように赤黒い小便が沢山出て、一晩で腹満が治ってしまう。黄疸の熱は、小便から熱と共に去ってしまう。</p>
<p>弁陽明病脈証併治第八第57条 (傷寒論)</p>		
<p>「陽明病、発熱汗出ずるは此れを熱越と為す。発黄すること能わざる也。但だ頭汗出で、身に汗無く、劑頸して還り、小便不利、渴して水漿を引く者はこれ瘀熱裏に在りと為す。身必ず黄を發す。茵陳蒿湯之を主る。」</p>		
<p>熱越、能わざる、出で、劑頸して還り、在り、主る</p>		
<p>解説 陽明病胃実で熱を發したときに汗が出るのは、これを熱越とする。熱越とは、体内の熱が皮膚を越えるということである。その胃実で、汗が出ないと熱が皮膚を越えることが出来ないから内に熱がこもってしまう。ところが汗が出ると、汗と共に皮膚から熱が出るので熱による黄を發することが出来ないのである。その場合に頭だけから汗を發し、頸を境にして下半身には全然汗をかかず、その上に小便不利し、頭以外には熱を放散することが無いために中に鬱熱がこもり、そのために渴して水やすっぱい飲み物をやたらに飲みたがる者は、瘀熱が裏に停滞しているのであるから、身体に必ず黄を發するのである。それには茵陳蒿湯が主治する。</p>		
<p>参考 黄疸に対する対応 茵陳蒿湯は瀉熱で、湿熱黄疸を瀉下退黄する。 梔子柏皮湯は清熱で、清化退黄する。 麻黄連軀赤小豆湯は散熱で、解表退黄する。 茵陳四逆湯は寒湿黄疸を温化退黄する。 抵当湯は瘀血黄疸を逐瘀退黄する。</p>		
<p>茵陳蒿湯証</p>		
<p>新古方薬囊によれば「黄疸で熱があり、小便が出ず頭だけに汗が出て身体に汗が無く、咽喉が乾いて水っぽい物や酸味のある物なら何でも欲しがると言う者、又は少し熱あり、時に寒氣がし食を欲しがらず、小便が少なく眼の中に少し黄色を現わす者、此の場合大便は大抵秘結する傾向がある。茵陳蒿湯は兎に角黄疸の聖方なり。」と記されている。</p>		
<p>弁陽明病脈証併治第八第82条 (傷寒論)</p>		
<p>「傷寒7,8日、身黄橘子色の如く、小便不利、腹微満の者は茵陳蒿湯之を主る。」</p>		
<p>解説 傷寒にかかって7,8日経って、身体が黄色くなり、その黄色い状態が丁度、ミカンのような色をしていて小便の出が悪く、腹が少し張っている者は、内熱より来ているのであるから茵陳蒿湯が主治するのである。</p>		
<p>太陽病で、汗・吐・下などにより津液を損傷することにより、太陽経の熱邪が陽明経に内攻すると目痛、鼻乾、身熱、口乾などの症状が現れる。胃家(胃・小腸・大腸)は熱邪のために乾燥し潤いを失うために大便も硬くなる。この場合太陽経の表証が少しでも残っておれば、陽明経の腑の熱になり切っていない、脈も浮であるので發汗剤で發散させる。</p>		
<p>胃家の燥熱のために津液は追われるように小便として出るので小便が多くなる(小便頻回)と、津液は胃家に還元できない故に大便は硬くなる。即ち小便回数が多くなる程、胃家の燥は悪化し、便秘もひどくなる。また胃家の燥熱のために、津液が追われるように汗が多くなり、胃家が乾燥して大便が硬くなるといった悪循環が発生し、また停滞した熱邪が上行して、心を蒸すと、煩躁や譫語が発生する。この場合、まだ津液が損傷するまでに至っていない、軽度または初期の段階の陽明病腑証のときは調胃承気湯で軽く下して胃家を調和させるとよいが、津液の損傷がみられる時は小承気湯で下して腸から熱を抜いてやる。陽明腑証の胃家の燥熱が盛んとなり、津液の損傷もひどくなると、追い出される津液も低下するために、沢山の汗は出なくなり、小便の回数も少な目になる。また乾燥した硬い便が停滞すると、胃家の気の流通が滞るので、5~6日甚だしい時には10日以上も排便がなくなり、腹満、腹痛を伴う。また大腸の腑気の流通が滞ると表裏関係にある肺気の正常な宣散肅降が出来なくなるために、喘(咳)が生じる。また腑気の流通が滞ることにより、血脈の運行に影響するので遅脈となり、その脈は実で力がある。また燥熱が陽明の腑である胃家に停滞しているので陽明の気が最も旺盛な時(陽明大腸は午後5~7時、陽明胃は午後7~9時)に、正気と熱邪の争いも激しくなるために、日晡潮熱が生じる。陽明腑証の熱邪の勢力がとても強く、燥熱のために、津液が損傷し乾燥したピークの段階では大承気湯で瀉下燥熱という果敢な処置を逸せずにとる必要がある。もし処置を取らないと、燥熱が体内奥深く侵入し、腎陰をも損傷し、視力がぼやけ、眼球の動きにもぶる危篤な状態になる。以上のように陽明腑証では、燥熱により津液が追いやられるために、発熱、発汗、小便頻回などの症状があり、津液は熱を伴って停滞しないで外へ追いやられて減少して行く、この様な時は黄疸になることは無いが、陽明腑の胃家の熱邪が湿邪によって閉じ込められると、津液を外へ追いやることが出来なくなり、無汗、或いは頭部に発汗があっても頸部以下は無汗で湿も熱邪と共に湿熱となり停滞するので、小便不利となり、裏熱の停滞により口が渴き沢山の水を飲む。腹満となり、心中懊憹するようになる。胃家の熱邪による便秘も伴う。そして湿熱の停滞により胆汁の疏泄機能も不利となり、胆汁が溢れて黄疸になる。この陽明湿熱による黄疸は鮮明な黄色で「陽黄」ともいう。茵陳蒿湯を用いる。</p>		
<p>茵陳蒿で脾胃の湿熱を驅除し、梔子で心に上衝する熱を小便から排泄し、大黃で瀉熱導滯する。</p>		
<p>方劑決定のコツ(藤本 肇先生)の解説</p>		
<p>茵陳蒿湯は、邪熱が外に甚だしくて、体液が下に泄れないため、小便不利、腹微満を生じるが、梔子柏皮湯(山梔子・甘草・黄柏)は、身黄、発熱を主とする薬方であるから、内外の熱は茵陳蒿湯に比べれば弱いと言える。薬方から考えても、茵陳蒿の苦平と、甘草の甘平との相違と、大黃と黄柏との相違がある。</p>		
<p>茵陳蒿湯証</p>		
<p>黄疸で熱があり、小便が出ず、頭にだけ汗があり、口が乾いて飲みたがる、便秘、少し腹満、舌質が紅、舌苔が黄膩、脈が滑数である。</p>		
<p>参考 下焦に熱がこもり、小便が出ない時は、五苓散・猪苓湯を用いる。</p>		
<p>下焦に熱がこもり、小便がよく出で瘀血を伴う時は、驅瘀血薬を用いる。</p>		
<p>下焦、および中焦に熱がこもり、小便不利し、便秘し、少し腹が張る時は茵陳蒿湯を用いる。</p>		
<p>黄疸病脈証併治第十五第15条(金匱要略)</p>		

「穀疸の病たる、寒熱食せず、食すれば即ち頭眩し、心胸安からず^{きゅうきゅう}久^{きゅう}久^{きゅう}黄を發するは穀疸と為す。茵陳蒿湯之を^{つかさど}主^{つかさど}る。」

解説 穀疸の病とは、悪寒や発熱があり、食欲がなく、脾が傷られて力が弱いために、無理に食しても水を循らすことが出来ないので、頭眩（頭がクラクラとして、目まいがすること）を生じる。従って腎も弱っており、気と血の循環もうまく行かないために心臓や胸中が気持ち悪く落ち着いていられないで、このような状態が久しく続くと黄を發するようになる。この様な穀疸の病を起こした場合は茵陳蒿湯が主治する。

茵陳蒿湯を服用すると、小便が当然出るはずである。そして出る尿はサイカチを煎じた汁のように正赤である。そして一夜で腹が張っているのが減じる。それは黄疸の熱が小便と共に去ったのである。

穀疸の病は、胃熱、脾寒で食べたいが食べられなく、食べると営血衛気が發達できずに頭眩を起こし、湿熱が鬱発して心、肺を衝き、心胸が不安となり、段々と湿熱が鬱して脾の黄色を發するようになる。